

大塩の乱新資料紹介

菊池真一

筆者蔵の資料に『難波湊秋花噂』なる写本がある。全十巻のはずだが、残念ながら巻一・巻二・巻四・巻十の四冊しかない。『国書総目録』『日本古典籍総合目録』にも見られないので、新資料と言つてよからうと思う。題名は「なにわみなとしゅうかのうわさ」と読むのであろうか。内容は、大塩平八郎の生い立ちから乱に至るまでの記述である。ただし、「大塩平八郎」とはせず、「大篠桂八郎」としている。巻一・巻四・巻十の末尾には、「作者曰」「作者いはく」として、作者の感想を付け加えているのも特徴である。

以下、『難波湊秋花噂』巻一・巻二・巻四・巻十を翻刻し、巻一の影印を掲げる。翻刻にあたり、常用漢字・人名用漢字については新字体とした。濁点は原文のまま。句読点はない。

難波湊秋花噂 壺（表紙）

難波湊秋花噂惣目録

巻の一

一大篠桂八郎先祖由緒の事

一大篠桂八郎十六才にて江戸行の事

ならびに剣術鎧術修行の事

一桂八郎江戸より帰国して役所へ出勤の事（目録一オ）

一桂八郎切支丹邪法退治の事

一桂八郎願計を以難法者を救ふ事

巻の二

一大篠隠居と成て門弟を集むる事

一大篠館へ不思議の武者修行来り桂八郎と立合の事（目録一ウ）

一武者修行塀壁へ寄文書の事

巻の三

一大篠桂八郎逆意大望を企つる事

一桂八郎謀略偽つて薩州行の事

巻の四

一大篠桂八郎徒党をかたろふ事（目録二オ）

一市中長者江大金無心の事

巻の五

一落し文の事

ならびに施行の事

一大篠親子等妻妾を手討にする事

巻の六

一庄屋を殺して百姓を語らふ事（目録二ウ）

一大篠父子加徒の面々手配りの事

ならびニ遠国より加徒の父母尋来る事

巻の七

一平井助右衛門訴人の事

一大篠桂八郎悪事露頭の事

巻の八（目録三オ）

一市中放火乱妨の事

ならびニ捕方御役人江敵対の事

一味黒田隼人討取る、事

ならびニ乱妨勢遁失の事

巻の九

一徒党の者諸所にて捕取らる、事」(目録三ウ)

一大篠桂八郎同倅勝之助よし野屋五郎兵衛かたにしのび居る事

ならびニ五郎兵衛が伝

巻の十

一字治山彦九郎大篠桂八郎と吉野屋五市兵衛か宅にて問答の事

一大篠桂八郎父子自殺の事」(目録四オ)

一大篠桂八郎父子一味徒党の輩ことく御罪科におこなはる、事

已上目録畢」(目録四ウ)

難波湊秋花譚

巻の壱

国家豊におさまりぬるは君の徳なり臣民よくしたがひぬるは君の仁なりいわんや君子徳は風なり小人の徳は草なり草に風をかふ時は則伏す是天の命也」(一オ)人の順なり然れとも家に鼠あつてたからを損す国に逆賊あつて国をさわがす是天の破順の積悪いかでか神科のかるへきや終におのれが身をおのれと裁にいたるむべなるかなまことなるかな時に天保八酉とし二月十九日浪花乱妨騒動を尋ぬるに爰に大坂天満川さき」(二ウ) 四軒屋舗に住で大篠桂八郎といへるものあり先祖はしかと尋ね見るに其むかし今川義元の末駿河に有て百八拾万石の大家たりし時其幕下に属して知行五万石を領し大篠桂大夫の子孫なり然るに今川義元永録四年のころ織田信長と桶狭間におゐて合戦におよびよしもと」(二オ) 軍配つたなくして織田のため一時にほろび是に属せる諸家のめんくのこらずほろびうせたり其砌の大篠桂大夫天晴無双の勇戦をなしともに討死の覚悟なりしに主君義元の主命によつて忠義を重んじ其場を切抜すぐさま本城にはせ帰りよしもとの一子漸く二オ」(二ウ)

の幼君弓太郎をいだきて尾州升田むらに身をひそめ時あらはふた、び今川の家名を起さんと此幼君を守りそだてけるに終に桂大夫升田村におゐて病死せりこの弓太郎是成長の後は武の道を嫌らひ其身大篠の相続して終に子孫升田村の民家となりぬ然る所かの大閤秀よし公」(三オ) 天下をしろしめし大坂に在居し給ひしころ少しの由縁あるによつて此与力役を乞ひ蒙て恩録二百石を頂戴いたして子孫繁昌して数戦に及ぶ此大篠桂八郎になりて都合十三代目にあたれり誠なる哉貴賤の身にかぎらず帰つて十三代目にあたるとの必らず一癖ありて家を建るか」(三ウ) ほろぶかの吉凶をすともかしより言ひ伝ふるはむべなり此桂八郎生得多才にして六七才のころよりとかく武芸をこのみたまにも同輩の小児を友とせず年へたる大人の賢者とまじはりさまの古事を問ひ又学をなすに一を聞て十をさととり幼稚にて其才大人も及はざる事なり」(四オ) 追く成長にしたがひ其器量等諸人感ずるばかり然れども父は利義一ぺんの人なれば是をふかく悦ばずや、もすれば小児に似合ざる大胆不敵の事をいひけるゆへにさまいさめける事度くなり子を見る事親にしかじ蛇は一寸にして其氣を知るとの古言あり此桂八郎後年」(四ウ) に及びて大望を企て家身をほろぼすほどの者なれば幼少より其氣ありと見へて父母行末を大ひに案事しとかやさるほどに桂八郎十六才の時に私館をぬけいで江戸表へ趣き名にあふ天下清道に入こみ諸学をまなひ剣術は宝蔵院流の達人米倉氏に仕へて昼夜其道に分骨」(五オ) を勞して早十か年の間江戸おもてにありし内大篠父身まかりしゆへに是非なく廿七才にて大坂へ帰へりすぐさま家督相続して役所へ出勤せりしばらく読大坂に東御役所西御役所と割て二ヶ所ありいづれもその嚴重なる事光くとして誠に恐れ多し見付八例之太玄関かたへにかの広き御役間」(五ウ) ありかざり立たる弓鉄炮じつていはや縄おびた、しく目のあたりにかけたりしは悪敷をなすのいましめとかや其威げん頭としていかなる大胆不敵のものたりとも此門に入ればおのれと身をかめ恐れ伏すありさまかしらを上る事あたわず爰に非常をいましめの館の徳はかくあらめ是に」(六オ) 御奉行を勤め給ふは江戸表の御旗もとにて万人の内にて天晴器量あるを撰らみ命じ給ふ尤永代定役ともあらず且また年限をなし折くかはり給ふなり然れとも与力同心衆は古しへより定人にて代る事なし尤是も東西に分つて東与力衆五拾人同心衆百人西も人数同断なり」(六ウ) 御用は東

西に月々格番につとめたまふかくて大篠家は先祖より東与力也然るに文政元年の比より東御奉行を勤め給ふは細井大和守様と申奉る御方なり西御奉行を勤め給ふは斎藤隼人様と申奉る御方なり御両公とも御器量拔群の御方にて諸人其仁政の厚きに諷呼せりさるほどに大篠(七才)桂八郎は廿七才にて文政二年卯二月より東御役所に出勤なし我が定役に粉骨をかへり見なく精勤に及びける元來博學の大篠器量すくれし桂八郎なれば其なす事に一ツとして抜目なければ御奉行様の御用ひかく別なり日をへす寺社役吟味役兼帶せりさても桂八郎只御上の威を(七ウ)かしらにいたゞき理法鏡の三ツを旨として仮りに私を以依怙の沙汰など更になく折節賄ひを以て諂らふ者あらば是をきびしくこらしめ露ほども賄ひを得る事なし是いと六ツケしき百姓の公事万端みづからぬきん出てことゝく道をひらき又は盜賊非道の者法を以て罪せしめ猶又(八才)寺院に宗法を破つてひそかに妾をかくまふ僧達多くありしをのこらずめし取り非道をきびしく科せしめ又は善惡を糺す役人の身に有ながら不屈の惡事を不行者と残らず捕取て重く罪せしめ扱又天下ニ重き御法度の切支丹の邪法をもつぱら行ふ者数多ありしをことゝく退治して(八ウ)のこらす死罪に行ひける是によつて御上の御感斜ならす諸役人の銘々大篠を敬して其私しなきに其身をかへり見て桂八郎を用ひぬ人ぞなかりけるされば大坂市中はもとより国々在々にも大篠の賢名か、やき大打童にても大篠くともびなせり爰に又文政八年の比大篠桂八郎が(九才)願ひによつて大坂市中をはじめて近在村々にすむやもめ後家または己か子なく兄弟なく少しの縁類もなく身柄一身の難洗者を御撰らみありし所漸く廿八人ありこの難洗者へ御救ひとして一人前一日百文ツ、と御定め其身一代の間下し給ふ是皆大篠の計らひなり其難洗ものどもおもひよらざる(九ウ)事なれば誠に夢見るこ、地してうれしさのあまりありがたき涙を流し御上の冥加を拝し大篠の仁心に伏して其仕合をよろこびける

作者曰大篠か、る事をねがひ計らひしは我仁心を諸人にしらしめんが為かまたは此頃より大篠のこゝろざし(十才)あつて若後年にいたり身を亡すときはわが菩提をとほせんためと見へたり彼の由井正雪が宮城野信夫両女を養育して親の敵をうたせし恩を見せし恩を着るとわか菩提をとわせんためにすべて無謀大望のくわだて有ものは(十ウ)其ために人をあわれみ情をほどこす事た

めし多し猶また大篠の名智良行の嘯せし事ともさまく数度有とも是を略す(十一才)

難波湊秋花噂卷の一畢(十一ウ)

難波湊秋花噂 式(表紙)

難波湊秋花噂卷の二

目録

一大篠隠居と成て門弟を集むる事

一大篠館へ不思議の武者修行きたり桂八郎と立合の事

一武者修行者塀壁奇文書の事(目録一才)

(空白)(目録一ウ)

難波湊秋花噂

卷の二

さる程に大篠桂八郎が仁名初に於て四方にか、やき其政道の正しき事諸人おじ恐れ三才の小児までもふかく尊みける然るにまたさかの年比なるに(一才)いかなる所存にてや病氣と言上し文政十三年寅八月に退役を願ひ十二ヶ年の間を勤役かざりとして隠居なしける然るに桂八郎我妻とてなく只老人のてかけをもてり尤実子なきにより先つころ河内国惣円寺村郷土木村角右衛門といへる方より次男をもらひうけ養子となし(二ウ)名を勝之介と改め十五才のころより身を連て御役所へ出て見習らひの席にありしを我跡目に付しが勝之助といへるも養父桂八郎に仕へて常に五常の道を学び政事の教訓をうけ得てよく其心をさとし父に勝らずといへども其身天晴なる若者なり文政十三年九月より大篠家督相続して東御(二才)役所へ出勤せりさて又東御奉行細井大和守様も同年十月に江戸より御めしにて引取給ふ其跡役に來り給ふは堅部大和守様と申奉る御方なり去程に父桂八郎は隠居の身となりてより只風月の道を事としてこゝろをなぐさめ光陰を送りけるが其徳をしたひて与力同心の若手衆あるひは市中の(二ウ)医師など平生の入魂をいひ立学文の師範をふかく乞ふ是によつて乞ふにまかせ師弟の約をなしける是を聞伝えて近国の大小名の家来内より其道をこのむ人々はせ來りてひたすら師範を乞ふ大篠もいな

むに所なく同じく師弟の約をせり夫より市中はもちろん在々より神主又は「(三才) 郷土などの人々追々来りて皆利に入て師弟となりぬ大篠隠居の身分といへども返つて身にとまなく然れども元よりこのむ道なれば身の多用を勞せず孔子朱子の教へをさとし孫子呉子が軍書をつたへあるひは医書または謂所神儒仏の三道の理を解き伝へいとねんごろに教へ」(三才) けるさて又剣術・鎧術は我目得せし宝蔵院流を師範に及ぶ是を学ぶも多かるにや丁々はつしと木刀の音門内にいつもたへまなし今は大篠の勇名四方にひびき尚く門弟も多くなり桂八郎を先生くと諸人敬ふ事神をはいするにことならずことに山海の珍味まことに山のこく大篠今は「(四才) 過分の栄花何に不足なき歟樂または博学の徳といひつべしさて又折く諸国に扁歴の武者修行来りて大篠と立合けれども誰か一人も桂八郎に勝を得る者なし然るに爰に一つの不思議ありころは天保四年十一月廿五日の事なりしが此日惣稽古とありて多くの門弟のこらず早天より大篠」(四才) の館へあつまり学文をなすもあり又剣術・鎧術を仕合もありけるが其日八ツ時ごろ八拾才ばかりの老人いと古るびたる大小を帶しあかつきたる白羽二重の小袖を身にまとひたる者大篠か館に來りて案内を乞ふていふ様われは中国辺のものにて候が当家のあるしか勇名を聞つ伝へてわざ」(五才) 尋ね來りて候間何卒御稽古所へ伴ひ給ひて芸道を見せ給へがしといふにより取次のものかくと大篠へ伝へければ桂八郎是を聞て遠方より我名を聞伝へ来るものなれば定めて武者修行なるべしさうく是へともなひ来るべしと有ければかしこまつて此老人を連れ来る桂八郎はじめ門弟の「(五才) 人々此人を見て大ひに笑ひさて見苦しき老人なりとおもひける内桂八郎此老人にいふやう御身武者修行仕給ふやと尋ねければ老人いふ様いなく左様の者にあらずわれはた見る事をたのしみ候なりといふ是によつて人々此老人にかまわずかわりく立合ふて有けるに此老人その「(六才) 立合を見てありしが半程より大音声にて打笑ひか、小児のたわむれを見るは目た? (一字不明) しいで帰らんと立上るを人々は聞て大ひにばかり老人をとめていふ様御身只今われ」が立合を見て小児のたわむれなど、あざけり笑ふは存外のいたりなり定めて御身手覚へあらんいざ一立合いたし」(六才) 申さんといら立て申ければ老人がいわく我只今おのゝ方の稽古を見て小児の戯れと申せし事は無利ならずまた芸道未熟なればなりわれい

さ、か手覚へあれは各々の望みにまかせ一相手なり申さんと其ま、場所へ出にける人々其高言をいよゝいかり腰骨折てくれんずと先一番に「(七才) 古弟高路義左衛門おどり出て三尺五寸の木刀を以て立向ふ然るに此老人得ものを持て無手にて立向ふ此あなどりに高路いかりを頭はし然らば參ると声諸ともに老人が頭上より一打と打込む刀を左りへ身をかわす高路透さず付入てこしのつがひを横打にちからを極めて打込を「(七才) 地にしづみて足を払らへば飛び上る其はやわざ電光稲妻目もたまらぬ達人なれば中く高路討勝負事おもひもよらずまなくらんでいこうなす夫より古弟の人々追々出合ふといへともひとたまりもなかりけり大篠はじめ並居る人々此早業にあきればはて続て出る者もなかりけるこの時老人が「(八才) いわく慮外ながら門弟の人々取るにたらず此上は師匠大篠氏と立合申さんといふ大篠聞て心得たりと其儘立て身拵らへ兼て妙を得し宝蔵院流の鎧追つとりて場所に出大またに身を構へ鎧を中段に取て立向ふ此時老人門弟に向ふていふ様わが得物は太筆に墨を染て玉はるべしと」(八才) 乞ふ人々不審におもひながら太筆にすみを染て相わたす是を右手にもつて大地に座して此筆を目清眼にかまへて出向ふたがひにす、まずいら立すすきをうかひししばらくにらみつめてぞ有けるに此老人始めより地に座してありしがやつとかけ声ともろともに大地をた、いて立上るをこのすきを「(九才) 見て桂八郎得たりと鎧をくり出し老人が胸もと目かげ付込む鎧を筆にて払らふ直様鎧をくりもどし又付込むを左りへ払ふ陰にとち陽に開らき向ふにあはれ横に立其早業まことに妙く桂八郎も爰ぞとおもひ秘術をつくして仕合ども中く及ばぬ奇妙の早業一時あまりも立合ひしが大しの「(九才) いらつて付込む鎧を筆を以てこくふの間へ雷のごとく声もろともに術を極めてはね上ければ大篠身体はうき身のごとくよるめきながらうしろの方へ六間計もしさつたり此間に老人がもつたる筆を取直し後の塀の白壁にむかつて大文字に書付けるその文にいわく」(十才)

古今勇望現一面門身立而現父母後世三名上孝元意也

伊勢のうみ千尋の底のあわび貝身を捨てこそうかむ瀬もあれ
かく書しける此時大篠老人のために大ひにはねられたるま、再度立合ず鎧をすて、老人か前に座してこと葉をあらためて「(十才) いふ様誠に恐れ入たる貴老が手の

うちなか／＼凡人の業にあらざ御身はいづくの御方御性名はなんと申候やらたつねければ老人かいふ様われは中国の者にて姓名を名乗るべき者にあらざまた縁あらば御ちからにもなり申さんといひ捨て立帰らんとする大篠是をふかくとゞめけれども中／＼承知（十一オ）せずいづくともなく出行ける跡にて人／＼老人か書し堀際にすゝみ寄て見るに筆勢天晴にて余ほどよき筆なりその文を読んで人／＼大ひに不審におもひける其日もはや黄昏におよびければ皆／＼門弟の人／＼暇を告て我家に帰りける跡にて大篠桂八郎つく／＼おもふやうは今日（十一ウ）来りし老人こそ凡人ならすわれと立合うちに白壁に書し文は我れ心中に的せる文なり彼いかなればかゝる事をかきしやと其氣をさととりて不思議に思ひながらしばらく思案して寢所に入にける」（十二オ）

難波湊秋花囀巻の二畢（十二ウ）

難波湊秋花囀 四（表紙）

難波湊秋花囀巻の四

目録

一大篠桂八郎徒党をかたらふ事

一市中長者へ大金無心の事（目録オ）

（空白）（目録ウ）

難波湊秋花囀

巻の四

光陰矢のごとくはや二月を過たりけるがさるほどに大篠桂八郎長の旅寝にあきはて、恋しきおもひにて八月十八日七ツ時二私館へぞ帰りけるさて四五日を過て門弟（二オ）中へ廻文をもつて帰宅の趣き達して長の道中のつかれも休候へばおの／＼学事遠慮なく御来臨下さるべきよしひ入れければ待もふけたる門弟中我先にと来り集りみな／＼教授を蒙りける大篠一物ある身なれば常よりも尚親しみ教へける爰に門弟中の内に伊勢の住人に（二ウ）八田頭少といへる者あり天晴学文にも秀ていわんや武芸にも達したる勇士なるが桂八郎兼て此者を一番目ざして有けるがある日例のごとく来るを奥の間へひそかにまねき肩をひそめて小声になりてい

ふ様いかに頭少殿おの／＼よく知らるゝ通り先達て薩摩より御請待ありしによつて我が学道を称美（二二オ）ての事とおもひ彼地へ参りし所なか／＼左にあらざ忝けなくも御太様御目通りにまねき給ひ某しを武士と見給ひて蜜／＼御内意有其用義誠に大事にして一応一席の事にあらざ某し義によつて是をうけ合ひ帰国せしといへどもいまだ唯々へも口外せず然れとも我門弟多き中にも御身は（二二ウ）天晴大丈夫の一人と見て一大事を打明てかたるふとおもへりたとへ得不得はともかくも必らず他言有べからすと有ければ八田頭少座を改めてこと葉を糺し是は師の仰せとも覚へず候某し年来文武の道に心を勞し候はあた事にはついやすにはあらず其行ひをはいたするぞ学ぶかひに候某し（二三オ）を人として大事をかたり給ふに他言して人外にならんやたとへ鉄湯の罪をうくるとも必らず口外はいたし申さず其義は御安心下さるべしと有ければ桂八郎大ひによるこび御身の氣質左もあらんしからはかたらん聞玉ふべし其一大事の御内意別義にあらず西国一の大家島津家の今の御主君智有徳（二三ウ）の名君にて渡らせ給ふか当時天下に對して深き御趣旨有て既に旗上して生死を決せんと御評定最中なり是によつて御太様某しに仰せ候には薩摩より江戸表まで三百五十里あまる遠路なれば万事の都合大ひに悪しく其都合よきに計るに大坂の城を本城と定め事を計らはゞ諸事（四オ）の都合よしといへどもいまた幸ひを得ず然るに汝じこそ義勇の武士ことに大坂に住んで勝手をよく知る事なれば此事を願はんかため蜜々請待せしなり汝じ此義をうけ合ひ事をはかり大坂城をのり取呉れなば予すぐさま大勢を引具して国元を発足なし彼地に趣き入城して事をはからはん其時（四ウ）こそ其恩賞に汝か乞ふにまかすべしさて是を受合て大坂の城を予に得させせしといかに大篠意変きかんと御上意也もし某し不得心ならば其場に於て討捨ん諸士の者さま也某し其勢ひに恐るゝにはあらねどもわれを武士と見て貴人の御たのみ義を見てせざるは勇みなしとやたしかに請合立歸りたり（五オ）其元の起りはかやう／＼と邪弁利口にこと葉誠しやかにかたりければ八田頭少是を聞て大ひに驚きしが座を進んでいふ様こは一大事にて候当時威勢光／＼たる島津家より夫をたのみ給ふは武士の面目其身のはまれに候又是を異変なく受合給ふは大丈夫の事にて候聖賢の師なれば何条（五ウ）仕損じの有べきやさて／＼勇々敷事なり且また私し義御用ひ有て益なき者に候へとも及ばずながら同意い

たし度事をはかりたしと有ければ桂八郎大ひに悦こび御身こそ一士大丈夫の万兵を得たるよりも尚々よし然らば某しに同意事成就せばともに譽れを上んといひつ、兼てこしらへ」(六才)置たる一味連判の巻を取出して双方是々ゆびを切て血をそ、ぎ誓ひを立て約をせり夫より大篠親子八田もろともこ、ろを合し其謀略を工夫いたしけるさるほどに桂八郎は折にふれ時にふれ目さす門弟を啗人ツ、八田頭少に申せしごとく薩摩よりの御内意と偽りこ葉をくわだていひけるゆへ」(六才)元来大篠に帰伏せる人々なればみな加徒同意せり是によつて一連判に血をそ、ぎ親兄弟たりとも他言せじと約をなす其徒党の連名は後に記す

作者曰さて大篠薩摩よりの御内意と偽り加徒をかたらひしは是則ち実々虚々の謀略にしてためしなきに」(七才)あらずかの由井正雪が徒党を語らひしも紀州様より御内意と偽りて人をかたらひしとかや桂八郎さるべきものなれば氣に順し変に應じて此謀事を用ひて薩摩よりの御内意といつわり人々をかたらひしにおのゝ謀略とは知らざりけるか豈はからわんや」(七才)壁に耳ある世のことわざ爰に大篠の奥まわりを勤める下女あり名をお高といふ生得如才なきものにて家内の氣に叶ひ幾年を爰につとめけるが此程より大篠親子度々一間へ引籠り小聲にて談しける故に女ご、ろの邪智ふかくもしやわらはが」(八才)事ならんかと六月廿六日に薩摩行の謀略をひそかに勝之助にかたりてありしを此お高ふすま越しに次の間にて残らす此蜜計を聞て大ひに驚きしが爰に又大篠が門弟に同心役人平井助右衛門といへる人あり此助右衛門ふとむすほる、恋の手綱にお高と」(八才)いつぞやより契り合ひ忍び合ひかきなりわりのなき中となりけるが然るに此お高大篠の蜜計を聞といへどもかつて他言せずふかく包みてありしがふと思ふにもしやいとしき平井さまの此大望に一味し給ひ後日に御身に変事もあらばとおもひ或日」(九才)おたか助右衛門にかの大篠の謀計をひそかにかたり薩摩よりの御内意とはいつわりの事を残らず蜜談におよひしかば平井大ひにおどろきしがはたして大篠薩摩より帰宅の後に加徒をかたらふ平井もともにかたわれしが師弟の恩義もだしがたく」(九才)夫と明さす加徒せしなり

さるほどに大篠は事を十分にはかりお、せ多くの加徒をかたらひしがさてかたらは

れし同意のめんく師弟の義により儀によりておのゝ生死をとにもせんと折く大篠の館にあつまりひとへに事をはかりけるさて又兼て桂八郎の計らひにより主は元より加徒の人々」(十才)鎧兜鎧長刀におよび鉄砲玉薬または竹鎧陣笠までまさかの用意は抜目なくかたのごとくにと、のへ置とかくに時を見合せて世の凶事変をうかゞひけるに光陰早くも過渡り天保八年とはやなりにける時に天災なるかな凶なるかな近來大ひに順氣があし敷さむき寒中に陽氣みちて身に汗を流す」(十才)ありさま暑き土用に陰氣として身に布子をまとふ不順三水五水の悪年にて是となく風雨しげく三山水に舟をつなぐ五水種をうしなふ世のことはざ山流れて里をうづみ諸国の水損幾万ともなく広大にして其凡をはかりがたし是によつて五穀極めて不作ますく諸色其価高料に及び世間の」(十一才)困窮爰にせまり今は飢饉の悪年となり世上の衰微いわん方なしされは世間ものさはがしく人氣もあらくなり大坂市中または在盗賊押入はいくわいしてあるひは大家をこぼちたりかしこの米屋をあばれたり日々の風聞かしましくさても御上様の御苦勞たとへがたなし是によつて心ある富家」(十一才)のめんく御公儀様に冥加の拝しかつはおのれをかえり見てわれもくと願ひ上広大の金を出して難渋者へ施行せりさるほどに大篠桂八郎加徒の人々諸ともに此度の変に乗じて事を計るに幸ひなり時こそ来れと大ひによるこひしばらく工夫をたくみけり」(十二才)

作者いわく今年天保八年正月十日比に大篠桂八郎大勢の加徒をあつめんため謀計工夫して御上様へ一条の願ひを上る其願ひの趣旨は近年打続ての困窮に付下く貧窮のものども極めて難渋仕り候間何卒御上様の御慈悲を以て場所を見定」(十二才)めて御救ひ小屋を立て大坂市中在々村々難渋のものを集め百日の間救命仰せ付られ後救ひ度旨ねがひ上たりといへども御奉行様思召有て是を御聞届給ばす是によつて又もや大坂の名ある富家の鴻池屋辰巳屋平野屋住友炭や自分」(十三才)すぐに参り難渋のものへ百日のあいだ救ひ得させ度候間何卒御加勢下され度と利害を解てくれくたのみ一万両づの無心申入れればみな断りいふて事ならず是によつて大篠大ひにいきどふり武士のたのみを反古にせしとにくき奴原」(十三才)とふかくうらみしとかや此謀計は成就せばすくひ小屋へ難渋のものを多く集めて我仁心を見せて事を計り加徒させん工夫

なりしが事相違せしは天道のおさへ給ふ所なり是をくわしくとくにはゞかり
有てこれをりやくす」(十四才)

難波湊秋花噂巻の四畢」(十四ウ)

難波湊秋花噂 十 大尾」(表紙)

難波湊秋花噂巻の十

目録

一字治山彦九郎大篠桂八郎と吉の屋五郎兵衛が宅にて問答の事

一大篠桂八郎父子自殺の事

一桂八郎父子一味同類それ〳〵御罪科におこなはるゝ事」(目録オ)

(空白) (目録ウ)

難波湊秋花噂

巻の十

さても捕人の役人宇治山氏は組子七八人をめし連れて油かけ町よし野屋か宅にいたるやいな直様五郎兵衛が妻りつをめし捕り下女下男にいたるまで残らず縄をかけ吟味」(二オ)に及ぶといへども妻りつも白状せず下人どもは元より知らざる事なればわかるやうなく是によつて宇治山大丈夫の人にて只老人奥の間座しきへふんごみて間事〳〵を見るに大篠居合さずいづれに忍んで居るやらんとなを〳〵奥に入て見るに奥座しきのはなれ家の向ふに一問あり」(一ウ)障子立切て内に人ある様子なれば宇治山是を見てさては此内に大篠しのび居るならんと庭をへだてゝこなたの方より大音声にて申されけるは其間の内にしのび居るは大篠桂八郎同勝之助ならずやとありければ障子の内より声あつていわくいかにも大篠桂八郎勝之助もろとも」(二オ)是にあり何用なるやと有ければ宇治山さてこそ身をこまへていわくしからは汝慥にきけ其方親子及はざる大望をくわだて先年より加徒を多くかたらひすでに事を発すべき期にのぞんで平井助右衛門かかえり忠によつて汝らが謀計露けんなす然らば天命運限りをあきらめ」(二ウ)いさぎよく切腹いたすこそ誠の武士なれ左はなくして乱人のごとく市中を乱妨におよひ科なき諸人を苦しむる事此上もなき惡逆非道法若無仁のふるまひなりかほどの重惡をはたらきながら身命をまつ

とうせんと身をしのばんとすることおろかといわん比興といわん天明科の」(三オ)かれがたし汝ら親子此家にしのび居る事石川新吾見とゞけしにより身不肖なれども宇治山彦九郎命をかふむり今日討手に向ふたりもはやのがれぬ天のあみなり汝らも已前は武道をみがき万人の中をぬきん出て大篠ともよばれしものならずやいまだ其心みだれずは尋常に繩か、」(三ウ)かゝれたま勇あらば某し刃向ふべしわれ相手になつて得させん返答いかにとありければ障子のうちより桂八郎声あらげ申けるはやあおろかなり宇治山惡逆非道とは其身等が事なりおのれ善惡ただす役人の身を以てまいなひ等に心をうはばれたくしの行ひ依怙の沙汰に」(四オ)およぶは何事ぞやわれ政事の非道を見るに忍びす役所をはじめ汝じ等に及ひ残らずちうしてわざはひをたゝんと先年より事をはかりしに狐狸にひとしき助右衛門が愛心によつて事あらはれ汝らが仕合せ我自業といふべし又市中乱妨いたせしはおごりに長じたる」(四ウ)やからをこらしめの為なりといわせも果す宇治山いわくだまれ大篠汝じ本逆賊心の企てなる事平井か訴人に其趣旨明白なり然るに今更邪弁を以て恐れ多くも上をあざけり下々の為なりとはあと方もなき賊言なりよし又左ほと汝じに仁理あらばすみやかに役所に出て申」(五オ)開らきいたすべしさある時は天晴大丈夫といひつべし左はなくしてかゝる町家に身をかめしのび居る事何事ぞや左程身命がおしくは何故かゝる大惡をなすやとこと葉終らぬ中程より大篠いわくやをれ宇治山よく聞べしたとへわれ役所に出てすみやかに道理をとくとも業欲」(五ウ)邪智の者どもなれば其利をきく事あたわず耳なきものにこと葉益なし且またわれ此家に居る事汝ら愚心に引ては命をしくとも臆病ともおもふならんわれ臆したるにあらざる命をしみてにあらざる今一つののぞみあればなり然りといへとも露頭に及べば今は是非なし汝」(六オ)討手の役目なれば猶予におよはず此所へふんごんで見事にめしとるべしと有ければ宇治山がいわく某し猶予いたすにはあらず武門のなさけを以て一言の問答に及ぶいかにもふんごんでめし取べし其障子ひらくべしと有ければ大篠いわく此方より障子ひらくいわれなし汝じひら」(六ウ)くべし宇治山がいわく其障子一重内はなんじか城廓いかなるはかり事あらんもはかりがたし某し君子にはあらねどもあやうきにちかよらず汝じ臆せざる大丈夫なればいさぎよく障子ひらくべしとありければ大篠いわくさすがの宇治山よくもいふ

たり某し臆せざる大丈夫を見た」(七オ) くは汝が乞ふにまかせわが城郭ひらくべし
いざふんごんてめし取べしといふより早く其間の障子を左右へはたとひらひたり
只忙然と座し居たり宇治山こなたより此体を見てじつてい持て立上りろうかづたひ
にあなたとこなたよりばたくと大音上て御上意と声かけこゑ諸共に」(七ウ) 其
間に入よと見えしが大篠親子もいちはやく前なる火鉢へゑんしやうつかんで入にけ
る其間に其身をどつかとうつ伏したりたちまちゑんしやうはち渡りて焰しやう戸
障子焼上り今はかのゑん硝しきりなりさしもの宇治山大ひに驚き其ま、跡とへ引
返し夫水もてよ消せよと」(八オ) 下知の下より組兵のめんく直さまはせより水
桶に水をいけて漸く火静りけり其火中をかきわけて大篠親子の体を取出しあら
ため見れば見るしやはらより上は焼こげて眼鼻もわからぬ姿也其ま、死骸を籠に
て御役所へ引取ありて死がい御あらための上にて塩漬に」(八ウ) して入牢仰せ付
られるまたかくまひしよしの屋五郎兵衛妻りつはおもきとがなればさびしく入牢
仰せ付られる夫より加徒の同類のものはおひく御めしとりとなりぬ且又勝之助
倅徳太郎事はある方にひそかにかくまひありしを御めしとりとなりぬ爰にまた牢
死し」(九オ) たるもの拾人あまり有しをみなく死骸を塩漬にして入牢なりさる
ほどに徒党の同類残党はもはやのこらず御捕取となりしか此一件江戸表御吟味とあ
りて存命の内おもだつたる一味のものをよし野屋五郎兵衛夫婦をはじめ都合七人同年
冬中に御召人にて江戸表へ引」(九ウ) る、然る所天保九年戌九月はじめつかたに
科定まりて大坂へ御引わたしとなり同九月十八日にそれく御罪科ありもつとも大
篠桂八郎同勝之助右両人はあさはかなる義に候ても逆意の謀計をくだてたる科
によつて死かる塩漬のま、引まはしの上張付となる其外」(十オ) 一味の内おもだ
つたるもの都合拾七人死がい塩漬のま、引まはしの上にてはり付となるまた獄門打
首となるもあり且又勝之助倅徳太郎は当年七才なれば拾五才まで入牢を仰せ付ら
れる其後におゐて御計らひあるとかやさてまた一件に付てはほうび仕給ふもの
は」(十ウ) ほうびし給ひつみし給ふ者はおもく罪におこなひ給ひのこる方なく事
相済代々万々歳目出度あふぎ奉る

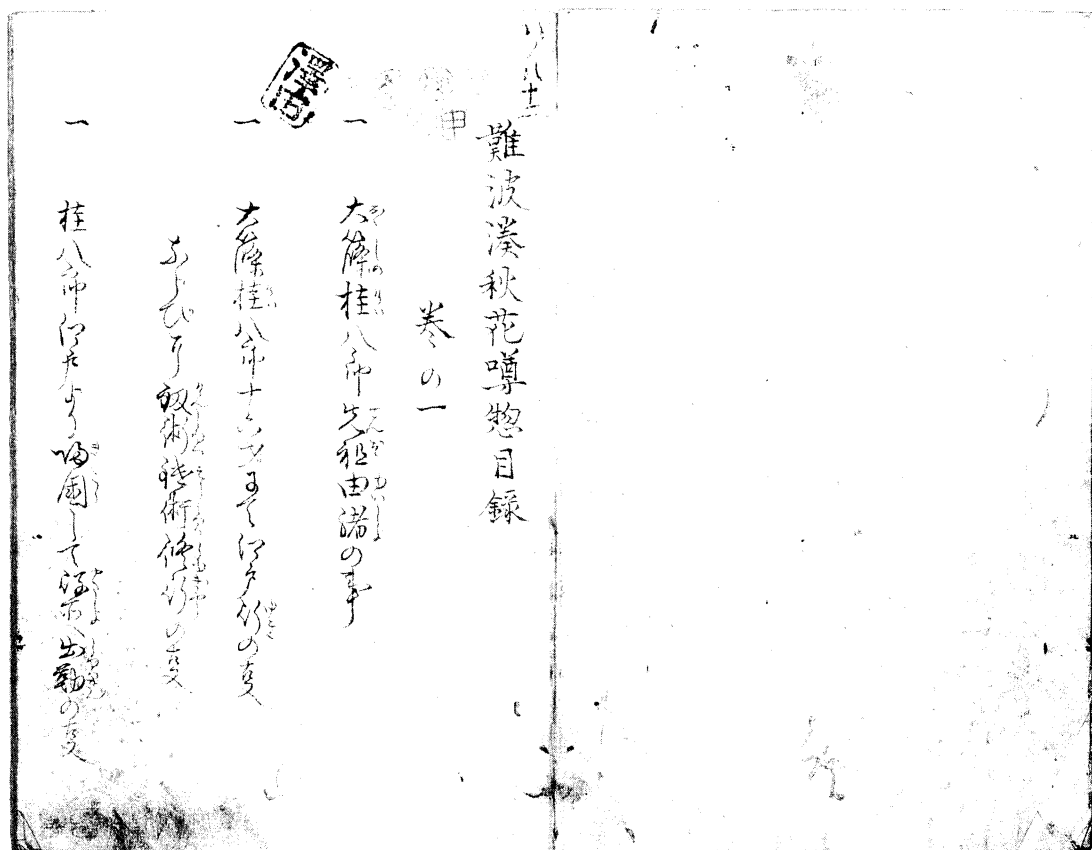
作者いわく或人の評にいふ大篠桂八郎は賢者英勇の武士なれば中く今に捕取
られずといへる人あり大ひなる非が事恐れを知」(十一オ) らざる愚人のこと

業にして笑らふにたへたる虚説なりたとへ孔子をあざむく智ありとも逆心非
道の業をして其身をまつたふせん事あたわんや尤大篠いさ、か文武忠孝の道を
かまへるをもつて諸人信用にしたがひおのれに」(十一ウ) まんずるこ、ろよ
り出てつゐにおのれが家身をほろほす事忠孝の道にたがひ悪逆非道のある
まひなり夫道を教へて道を知らざるりんかくの愚者にして賢者といふにはあら
すたとへいかなる賢者にもあれ天」(十二オ) 命之下条々そむきておのれあ
んかんたらんや尤桂八郎つばさありて虚空を飛ぶ通力はよもあらし又水妙を得て
海辺に住術はよもあらし然らば天下の科をおかし豈此国にしのび居る事あたわ
んやおのれのこ、ろより己れに」(十二ウ) まねくわざはひなればいつれにの
がれぬ天のあみなり然りといへ共むさんなり大篠因縁なりおのく人々栄花の
家にうまれながら月花を友とたのしむ身を己をおのれとなすといへとも死出の
はれにし拔身の鏢其切先につらぬ」(十三オ) かれ死苦の往生を諸人にさらさ
れあ、あさましき身の終りかな夫三界火宅の世に五大水沫三身あしたに栄花ひ
らきしも夕部には無常の山風にしたがひ宵に朗月をながめしも暁には別離の
雲にかくる一生はこれ」(十三ウ) 風の前のともしびに似たる万事はみな春の
夜の夢のごとしういてんべんの世なりと云々

難波湊秋花噂卷十 大尾」(十四オ)



(巻一表紙)



(目録一才)

(見返し)

桂八節、ヤ支丹邪傳、近江の支入、

桂
八
帝
天
斗
志
龍
者
を
助
け
て

卷
の
二

大條隱^{ひそ}和^わと^とぬ^ぬく^く門^{かど}和^わと^と築^{きず}も^もる^るを^を入^{いれ}

大原館ふと美の成者修り事桂八

市と立合のちえ

武者修治堀江
寄文書の書入

卷の三

大條桂公の送交大東亞企ては

桂
以
謀
學
傳
之
薩
明
何
の
意

卷の四

大原桂公の佐々木

(目錄一ウ)

市井書者に大志を有する

卷の五

新大入

ふじのう

大原秋子木書齋主人封に書名文

卷
の
六

庶民を救ふ

大澤又加佐の町に
おるの處

不心遠劇
加能山火
回浮求
久

卷の七

新井 忠孝の著

大原桂翁（イロハノミヤノキヲノリ）要事（イロハノミヤノキヲノリ）要事（イロハノミヤノキヲノリ）

卷の八

(目錄二才)

(目錄二ウ)

(目錄三才)

一 市中放火の始末

ふびく捕方事始末の始末

一 市黒田集人討伐の始末

ふびく市黒田集人討伐の始末

巻の九

一 使軍の者討伐の始末

一 大原桂八郎討伐の始末

まふく市黒田集人討伐の始末

ふびく市黒田集人討伐の始末

巻の十

一 市黒田集人討伐の始末

ふびく市黒田集人討伐の始末

一 大原桂八郎討伐の始末

一 大原桂八郎父の討伐の始末

く市黒田集人討伐の始末

已上 目録

難波添秋花導

巻の十一

市黒田集人討伐の始末

ふびく市黒田集人討伐の始末

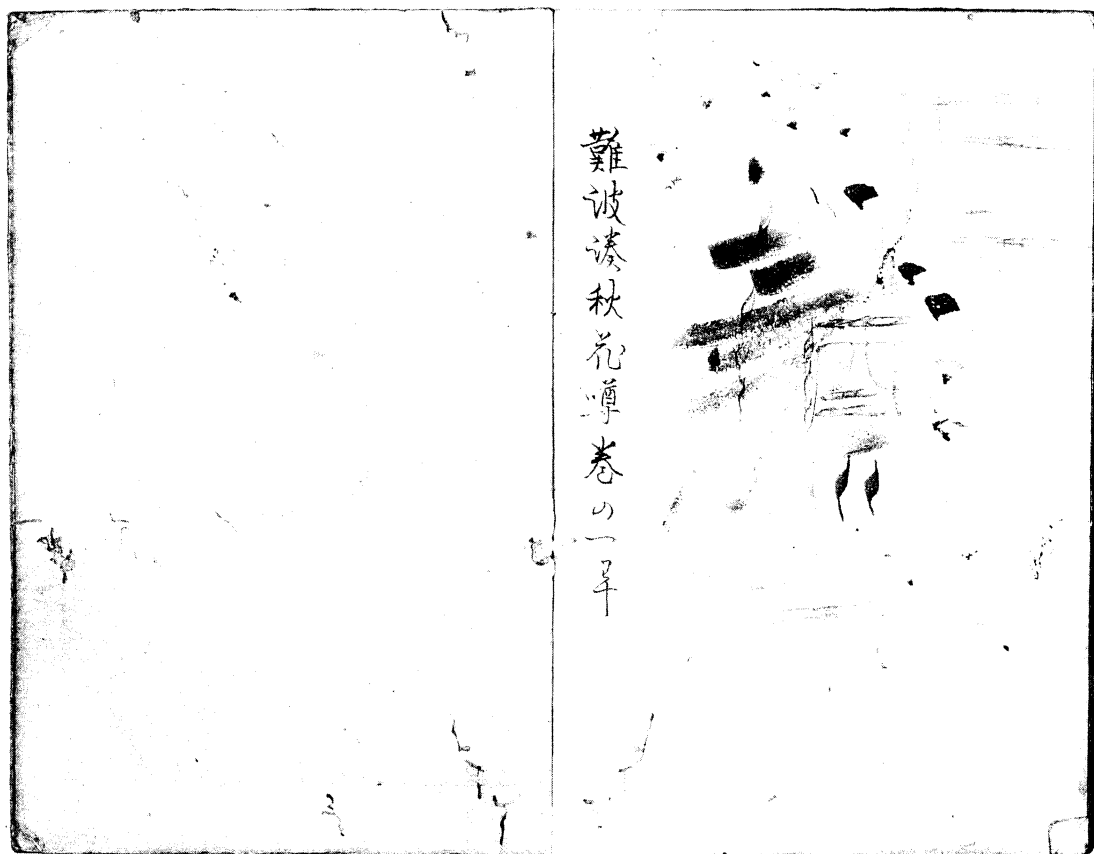
く市黒田集人討伐の始末

市黒田集人討伐の始末

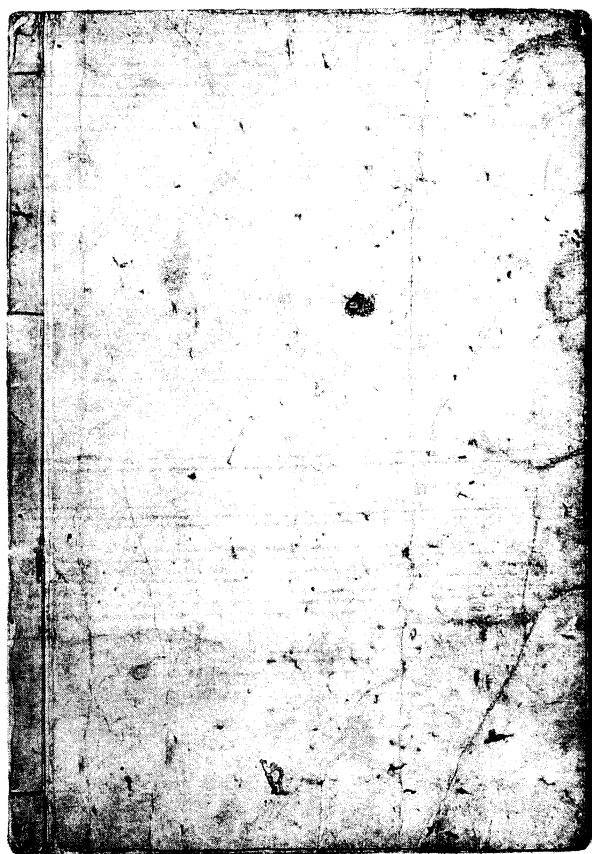
[illegible]

奉命を執りて、
 一、万の人の
 會に於て永代
 事をふし折る
 も与力同士の
 まふし是も東
 西人同んぬる
 南利を東元月
 かくて大原家
 文政元年の
 神井大ねむ
 親ありて其後
 忠義なるもの
 そとに於ては

(裏見返し)



(十一ウ)



(裏表紙)

Introduction “Naniwaminato Shukanouwasa”

KIKUCHI Shinichi

Abstract : This paper introduces “Naniwaminato Shukanouwasa” on Oshio Revolt. It has not been introduced up to now.